

トベラ (*Pittosporum tobera* Aiton) に関する新知見

北 見 秀 夫

(新潟県佐渡郡相川町入川)

トベラが佐渡に生育することを発見したのは昭和27年(1952)の夏で、小木の山の中であった。傾斜 40° 近い岩盤の割れ目に育ち、地表近くより三又し、二本がさらに二又して計五本が伸びて樹冠を形成していた。遠くから眺めると半球形の木が斜面にへばり付いた様に見える。地表近くで周囲 1.83m、樹高約 5m、トベラとしては大木であった。暖地性のこの植物がここにあるとは想像もしなかった。花期が終わったばかりで子房が膨大し雌しべが脱落したのものもあるから♀株にまちがいない。この附近はマムンの名産地と聞いていたが、それにかまわずさがしてみた。ヤダケまじりの藪であったが、ついにそれ以外には見つけ得ないで帰った。二度目に訪れた時は、杖をついた老爺と老婆が水田の畔に腰をおろしていたので、あんな木がまだ他にあるかと尋ねると、いや他にはないと返事であった。ではあの木のふとり具合はとただすと、老爺曰く、私はこの集落に婿に来て60年になるが昔とちっとも変わらないという。お年はと尋ねると、81才になるとのことであった。また、婿に来た時から1本しかないとの返事であった。小木町より細い小路で、しかも深い急な谷を越えてここまで来るには、急いでも当時2時間余りかかったが、同年の秋に三度訪れた。附近をさがすが、新たなものは見つかからない。それで、土地の所有者の家を尋ねて聞くと、いや最近見つけたのだが、もう2本あるとのことである。案内されると、1本は所有者のお墓の近くから約400m離れた地点の細く伸びたヤブツバキの密生している林の中に直径数cmのものがあり、もう1本はこの大木より約150m位離れたヤブツバキとヤダケの密生した藪の中に生育していた。よくも注意して見つけたものである。ここで考えさせられたのは、花をつける♀の大木1本と、幼木でしかも花をつけないもの2本との存在で、まことに不思議でならない。そこで、トベラは♀♂異株といわれているものの完全なものでなく、何かの

条件によると、雌株の花の雄ずいに完全な花粉が出来ることがあるのではないかと考えざるを得なくなったのである。

その年の秋、東京大学で日本植物学会17回大会が開催され出席した。分類専門のかたがたに尋ねるが、いずれもトベラは♀♂異株だよとの答えばかりであった。同年暮に、三重県久居市の谷口森俊氏より津市のトベラの種子を送っていただき、昭和28年の4月末と5月始めとの2回に分けて両津高等学校の庭に蒔いた。数週間たっても発芽しないので心配したが、6月になってからきれいに発芽した。もちろん初めてのことであったが、その後度々蒔くが同じ様な経過をたどり発芽率はいいようである。トベラは関東地方より南の海岸に自生する常緑の中喬木で、三浦半島の観音崎灯台附近にはよく生育したものが密生している。油壺の東大臨海実験所附近一帯にも生育し、湘南海岸の大磯より小田急に至る10数kmの間には防砂林として植栽された美林がある。下田港附近にも海岸の岩石上にあり、石廊崎灯台附近には崖の上やその中腹の土壌のあまりない所にもそれなりに自生して海岸美を形成している。本土の太平洋側、瀬戸内、四国の海岸、九州の大部分、宮崎の海岸、鹿児島、長崎はもちろん唐津の海岸にも自生していることをこの眼で見えて来た。昭和30年(1955)の日本植物学会第20回広島大会の会期中に、山口大学農学部長で植物病理学者の日野巖教授と宿泊を共にした。日野博士は佐渡の植物に対していろいろ質問され、筆者は山口県の植物に対して尋ねた。その時、トベラに話が及び、山口県では瀬戸内から日本海側(西側)萩方面までにはあるが、島根県境に至ると少なくなるとのことであった。島根県ではどうかと伺うと、多分ないのではないかとおっしゃられた。佐渡にトベラの自生することを話すと大変不思議がられ、「それはまことに珍しい。ほんとか」と念をおされた。ほんとうにあるなら、それは天然記念物ものだよと話してお

られた。ここで日野博士の業績の一端について述べるのはどうかと思うが、生物に志ざす者について知っていた点にだけふれておきたい。ソビエトの著名な生理学者パーブロフ(1849~1936)は条件反射を研究発表された。パーブロフがこれを発表されるまでに世界数ヶ国の研究者に同じことを依頼された。当時東洋でただ一人の協力者に日野博士が選ばれたという。同博士はその時、宮崎高等農林の教授であった。パーブロフより沢山の手紙を戴いたとのことである。そこで、一通でよいからと恵手を申し出ると、いやそれらの手紙は、研究室の鍵のかかる引き出しに入れて置いたが、いつの間にやら持って行く者があると見えて数が少なくなり、あなたにあげたいが、このような研究の舞台裏の物は後世に残すべきものなので本意であるが差し上げられないとのことであった。同博士は停年退官後山口県の文化財保護委員長となられ、後進の指導に当たられ、その道の神様のように慕われている。その後、山口県の植物でほしいものは何でもあげるからと度々お便りを戴き、また著書や研究論文を御恵与頂いた。いまも(1980)、宇部市に御健在である。

トベラは常緑の日本特産(固有)の植物であることは周知の通りである。分類に明るく、植物形態学、特に進化的の研究に優れた業績を残された当時東大に勤めておられた小倉謙教授にも伺ったが、いや♀♂異株であることは知っているが君のいう疑問について聞いたことも読んだこともないとお答えを頂いた。また、ケトベラの命名者で当時金沢大学におられた正宗巖敬教授にもお尋ねしたが、答えは、小倉教授と同じであった。

県立両津高等学校校庭に蒔いたものが生育して苗となったので、昭和30年(1955)の春、拙宅に1本定植した。昭和32年には、樹高1.5mに伸びた暖地性のこの植物が初めて花をつけた。白い五花弁で芳香を放つ。開花後数日すると花弁は黄色となり、花梗より脱落するので♂株であることがわかった。昭和34年(1959)8月の朝、ふと見ると二房の果実がぶらさがっているではないか。夢に画いた空想が眼前に見えるではないか。わが目を疑うように何度見ても、さわっても立派に結実したトベラの果実であった。同年12月になり、もう果皮が裂開してもよさそうなものだと思って見ると、枝がちぎられている。無念やるかたなしであった。もうこのような現象は、見ることが望めないであろうと思った。

昭和54年(1979)の10月末に、東京都立大学牧野標本館の小林純子氏よりの便りで、北見先生は、牧野先生か

ら一番可愛いがられたと聞く。それで短冊に牧野先生の句を一つ書いて送ってほしい。また、トベラの♂株に結果したのを見たと思うが、その後どうなったのかも聞かせていただき度い」と書いてあった。それで気がつき、数年間放置していた我が家のトベラにオトメカズラ、ノブドウ、エビズル、ツタ等が屏越しに一杯からみついているのをはずし始めた。吃驚仰天、20数箇所の小枝に小房で果実も小さいものがついているではないか。20数年ぶりに♂株に結果結実とは思わず才を叫んで飛び上った。近くを通る者が驚いて立ちどまってみている。なかには、なにがそんなに嬉しいのかと近寄って来る者もあった。すぐさま、その模様を小林さんに知らせた。普通の♀株は一房に20箇前後の果実をつけるが、♂株は一房に多くて5~6箇で、2~3箇のものが多い。しかも♀株の果実に比べて小粒である。したがって果実の中の種子も数が少ない。まだ果皮が青いのを、カラーフィルムとモノクロフィルムで撮り、旬日ごとに黄変するまで両カメラで撮った。果皮が黄色に成熟しても♀株よりは果皮の裂開が遅い。12月の終り頃に至ってやっと裂開し始めたので、小鳥に啄ばまれるのを恐れ、標本用と播種用に収獲した。小林さんにも、果実のついた小枝を3本送付した。これは、牧野標本館に保存されている筈である。この♂株の種子を、昭和55年(1980)に蒔いたものが発芽して現在伸びつつある。

夢…なぜトベラが♀♂異株なのか。あるいは不稔だったのか。1本だけの小木の♀株に種子が出来ただけなのか。最近、小木の1本だけのトベラに、種子が出来ることがたまにあることがわかって来たようである。

ここ10数年来日本における電子顕微鏡による研究の発達はまことに目覚ましい。さらに、遺伝子工学が著しい進歩をとげたことは驚くべきことである。ここ数年、日本植物学会大会に併行した日本花粉学会や花粉研究会大会で発表を聞くと年を忘れ、時間を忘れさせられる。もうせめて30年いや20年も若かったら、飛びこんで行って一緒に研究したい衝動にかられる時がある。ぜひ種子を作る現象(花粉形成に胚珠形成)の原因、誘因を遺伝子工学より解明していただきたいものであると切望して止まない。また、今後の課題として、外部形態学的にこの植物の完全花となり得るものと、なり得ないものの花被、雄ずい、雌ずい、葯、その他で区別の出来る特徴を見つきたいものである。これらの問題は、現に研究中の者があるので期待している。